

カリキュラム概要

1. 医師としてのプロフェッショナリズムとコミュニケーション力

1年次の人文・社会科学、選択科目で、幅広い教養と豊かな人間性を涵養し、また心理学を基礎とする行動科学を学び、コミュニケーションの基礎を学ぶ。

また全人的医療人教育を目指し、1～6年次まで関連科目・実習を有機的に配置し、医学の学びに合わせて、医療人として必要な態度や責任感、倫理観、コミュニケーション能力を醸成する。1年次の早期ポリクリニック・地域実習 I、3年次の地域実習 II と、早期より福祉や附属病院内外の医療現場において体験実習を行うことにより、医学生としての自覚を促す。

4～6年次では臨床実習を通じて、医師、医療人のプロフェッショナルとして取るべき態度・あるべき姿を学ぶ。

2. 科学的探究心（生涯教育と医学/科学の発展への貢献）

1年次から情報リテラシーを学び、医学英語および医学医療統計の講義・演習が行われ、医学・医療情報を批判的に吟味する能力の基礎を固める。医学的知識の修得に加え、早期から学生個々の知的好奇心や研究を育む目的で、MD/PhD 制度を導入し、関心の高い学生に対しては早期から研究室での生命科学研究を体験する機会を与える。

基礎医学の学習を積み重ねた4年次には、基礎上級プログラムとして、学生が自由な研究時間をフルタイムで過ごすカリキュラムが設定されている。学内の講座や研究所等で、約6週間にわたり、教員による適切なアドバイスを受けることができ、学生個人の特性と興味に合致した自己啓発が可能となる。また医学研究への関心を高めるとともに、その後の臨床実習においても問題意識を持って学び、実践する重要性を理解し、生涯にわたる科学的探究心を醸成する。

また1～3年次まで英語を必修とし、英語による発表の場を与える。また1年次選択科目には、英語以外の外国語科目を導入し、多様な文化的背景をもつ他者を理解する視点を養う。4年次には選抜制ではあるが、交換留学研修プログラムを設定しており、現地での実習や、交換で受け入れている海外の臨床実習学生と共に学ぶことで、国際的視野を養う。

3. 医学的知識とその応用、診療の実践

医学的知識の一貫した理解を促すために総合科学（医学への準備）、総合教育（全人的医学教育）を配す。テュートリアルや少人数グループ学習を組み込んだカリキュラムを提供することにより、効率的かつ能動的に学習するとともに、興味ある事象を科学的に考察する力、得た知識を発信する力の育成を目指す。

1年次後期から2年次前期では正常人体の構造・機能を学ぶ。2年次後期では、疾病時の人体の構造・機能の変化を学び、さらに3年次では臓器別に構造・機能の変化から臨床医学の基礎までを統合的に学ぶ。マクロからミクロへの生命科学系(基礎医学)から臨床医学系へとカリキュラムを組み、医学の段階的な理解を嵩じる。

さらに社会医学の基本を学び、4年次に医療入門（症例を使った統合型臨床医学演習）で、臨床推論として知識を統合させ、全国統一試験である共用試験（CBT）を受験する。合格後、4～5年次では全診療科で実施する附属病院を中心とした診療参加型臨床実習（primary BSL）で実臨床を学びながら、医療の実践に必要な横断的な臨床知識と臨床推論能力をさらに修得する。6年次では、附属病院はもとより県内外の協力病院等で診療参加型臨床実習（advanced BSL）を行い、医師としての実践能力を高める。

4. 医療と社会・地域（福島をモデルとした地域理解）

3年後期から社会医学において、日本や世界の医療・社会保障制度と、様々なライフステージにおける保健の役割について学ぶが、その以前から地域実習 I（1年次）では地域の特別養護老人ホームや重症心身障害者施設の実習を、地域実習 II（3年次）では地域保健行政機関を含めた保健・福祉・医療の現場での実習を行う。5～6年次の臨床実習には、地域の診療所および中核医療施設や保健所を含めた実習があり、地域医療について学ぶ。

また1年次総合科学の福島学では、福島の歴史・生活や東日本大震災後の福島の現状について、PBL型の実習・現地見学会も含め、能動的に学ぶ。さらに放射線生命医療学、救急・災害医療、緊急被ばく医療の講義、放射線災害医療センターでの実習、テュートリアルを1年次から6年次まで有機的に配置し、福島の特性をいかした放射線・災害医療への理解を進める。